

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

アспект機能を持つ接辞の通時的考

著者	森田 信也
著者別名	Morita Shinya
雑誌名	経済論集
巻	40
号	2
ページ	265-276
発行年	2015-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00006954/

アスペクト機能を持つ接辞・形態素の通時的考察

森 田 信 也

A Diachronic Analysis on Aspectual Affixes and Morphemes

Shin'ya MORITA

Abstract

This paper examines the way affixes in Latin function as an aspectualizer, from aspectual, semantic, etymological and morphological points of view. We refer to *trans-V* and *-ize* and mainly to extended present stem including expansions like *-m-*, *-n-*, and *-d-* in Latin. Especially, we focus on the aspectuality of these morphemes are next to lost but are still maintained in some verbs in Latin. In case a verb indicates an event, the event sometimes consists of a punctual action and a durative state. For example, in the case of 'to sleep', it is natural that falling asleep at a certain point of time is followed by the state of sleeping. The meaning of a verb depends on the root on which it is based and the grade of vowel gradation. The suffixal morphemes help to take on a perfective meaning.

0. はじめに

形態論的に、語幹に接辞がついて形成された語が、時間の経過とともに、その痕跡を失い、現代語においてはもはや全く痕跡を見出すことが難しいものもある。ラテン語の *prae-hendo* は、フランス語の *prendre* になるわけだが、この *prendre* という語が、昔は接頭辞＋語幹という組み合わせから成っているのは、語源辞典の助けを借りなければ、知る由もない。

日本語でも中古の語彙に「うつろふ」というものがある。「移る」という動詞に、継続を表す上代の助動詞「ふ」がつき、「移らふ」となったものが、音韻変化で「移ろふ」になったものである。「移ろふ」の「ふ」は、もともと継続を表す助動詞であるから、「移ってゆく」という意味だが、時間の経過とともに、「ふ」が助動詞であるという観念が薄れて、「移ろふ」でひとつの動詞だと考え

られるようになり、「移る」という意味を念入りに述べる用法で用いられるようになった。

小西 (2000: 21-2) によると、この「移ろふ」の意味は、

1. 場所を変える・移転する (A地点→B地点)、
2. 色の変化「色づく」および「色あせる」(甲→乙への変化)、
3. 花が散る (1 から 0 への変化)、
4. 植物が枯れる (1 から 0 への変化)

の4つの柱から成るが、いずれも共通点は「甲の状態から乙の状態への変化」を伴うアスペクト的な意味を持っているのが特徴である。

英語では trans- および -ize や -fy という接辞が「X から Y への状態変化」を表す働きを持ち、translate 「X 語→Y 語」、Americanize 「非米→米化」、purify 「汚→浄」などに見るように、非常に生産力のある接辞である。本稿は、これらの語源を比較して形態論の観点から史的に考察することを目的とするものである。各接辞について語源的に遡れるところまで戻り、ラテン語、フランス語、英語におけるそれぞれの語彙の成り立ちについて共時的に分析して、それぞれの特徴にも言及する。

前半は、trans- と -ize を扱い、後半はラテン語に痕跡を残すアスペクト価を持つ形態素について論述する。

1. 接頭辞 trans-

1.1 印欧祖語

Watkins (1985: 91) によると次のような記述がみられる。

**terə-* “to cross over, pass through, overcome” with variant [metathesized] form **terə₂-*, colored to **traə₂-*, contracted to **trā-*

もともと「突き抜ける」(壁を破って突破する) というニュアンスを持った語根であったが、縮約形の **trā-* が、ラテン語では前置詞および接辞の trans になる。この trans の語源として、The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots では、動詞形 *trāre* 「横切る」の現在分詞に由来するものとしているが、Ernout et Meillet (1985: 313, 699-700) では、in+*trāre* の現在分詞に由来するには、in- 以外の接辞の *préverbation* は見当たらず、前置詞 in の派生形 *intrā* 由来のものという見解を提示している。

また、Tucker (1931: 244) では、Ernout と Meillet の説を採りつつも、*intrāre* の現在分詞に由来す

る説にも言及しているが、intrāreに加えてextrāreを引き合いに出している。Ernout と Meillet(1985: 204) では、extrāreは完了分詞の形しか存在せず、intrāreよりもさらに無理があると記述がみられるゆえ、本稿ではErnoutとMeilletの説を採用することにする。

1.2 ラテン語trans-《par delà, au delà de》

ラテン語のtransは、Ernout et Meillet (1985: 699) では以下のように定義されている。

Comme préposition, est suivi de l'accusatif et s'emploie avec des verbes marquant le mouvement comme le repos. En composition, à côté du sens de 《au delà》, a aussi le sens 《de part en part》: *trānsfigō*; marque le changement total dans *trānsformō*, *trānsfigūrō*.

ラテン語においては、前置詞として対格とともに用いられ静・動のニュアンスを含む動詞を形成する。接辞としては、「～を越えて」の意に加えて、「貫いて」の意も持ち、transfigo「貫く、突き通す」がその代表例である。さらに、「変形させる、姿を変える」といった「全面的な変化」も表わす。

ラテン語	意味	接辞の機能
trasn-bibo	「飲み尽くす」	(完了アスペクト)
tran-scribo	「転写する」	(A→B)
trans-eo	「越えて行く、渡る」	(「越えて」)
trans-ferro	「運送する、移動する、翻訳する」	(A→B)
trans-foro	「刺し通す」	(「貫いて」)
trans-fundo	「注ぎ移す」	(A→B)
trans-igo	「貫く、完成する」	(「貫いて」→完了アスペクト)
trans-numero	「数え通す、残らず数える」	(完了アスペクト)
trans-porto	「運送する、運搬する」	(A→B)
trans-veho	「あちらへ運ぶ、通過させる、移す」	(A→B)
trans-vendo	「売り渡す」	(A→B)
trans-volo	「飛び越える」	(「越えて」)

こうした複合語は、本来は「接辞の意味」＋「語幹動詞の意味」が単純に時間的・空間的な意味を帯びて本源動詞にプラスアルファの意味を付与するところからスタートして、次の段階で比喩的な意味を帯びようになり、最後にアスペクト的なニュアンスを帯びようになる。上の一例では、

本来的な「越えて」「貫いて」から始まり、A→Bへの変化、そして時代的には比較的新しい用法として「～し尽す」というアスペクト機能が発生する。Gaffiotのポケット版には帝政前、帝政期、後期と時代別に意味の発展が分かる記号が付記されている。

1.3 フランス語trans-/tra-/trè-

Rey (2000: 3889)によれば、フランス語においては、「～を越えて」「～を貫いて」意味を持ち、「通過」および「移行」など意味も示されている。しかし、ラテン語では、同根のtero「擦る」が派生し、transの系統からは動詞が派生せず、フランス語ではもっぱら、地名に付く接辞として、transdanubien (1775)、transjuran (1752)、transafricain (1892)、transasiatique (1901)、transcanadien (1930)などの形容詞を形成している。

その一方では、transborder「乗り換えさせる・積み換える」のような「状態変化」も多数見られる。

1.4 英語

寺澤 (1999: 1454)によると、IEの*terə- 'to cross over' から出て、*trāre 'to go through' を経て、ラテン語のtrans-とある。空間的なニュアンスが優位で、transmit, transportやtranspierceやtransfer, transform, translateからtranscendまで非常に幅広く派生している。ここでも共通して感じ取ることが出来るニュアンスは、A→Bへの移動または「Aの状態」から「Bの状態」への変化である。

2. 接尾辞-ize

2.1 印欧祖語

Watkins (1985: 103)によると、印欧祖語 -yo- は、*argu-yo 'to make clear' のように別の品詞から動詞を形成する接辞と記述されている。Germanicでは、-janという接尾辞になる。さらに、印欧祖語では、*id-yo-という動詞を形成する接辞としても生産力を持ち、ギリシャ語起源の-izeinはフランス語では-iser、英語では-izeという接尾辞として他動詞を形成する。「甲から乙への変化」を意味する語を多産する接尾辞であった。

2.2 ラテン語

Rey (2000: 322)によると、1050年頃にフランス語でbaptizerが初出とあるが、これは、教会ラテン語のbaptizare、もとはギリシャ語のbaptizein 《immerger》に由来する。古典ラテン語の時代にはほとんど行われていなかった接辞とある。

2.3 フランス語

Grand Robert の定義では、-iser について、Suffixe savant (du bas lat. -izare, correspondant au grec -idzein) entrant dans la formation de verbes dérivés de substantifs ou de noms de peuples, avec la valeur transitive et généralement factitive とある。やはり後期ラテン語からの合成語の形成で、基本的には、使役的ニュアンスを伴う接辞である。

Ernout et Meillet (1974: 131) によると、名詞および形容詞から pactiser, miniaturiser, fidéliser, tatamiser など非常に生産力を持った接辞である。

2.4 英語

寺澤 (1999: 744) によると、ギリシャ語 -izein 起源で、後期ラテン語 -izare および古フランス語 -iser を経て、中英語 -ise(n) とある。ギリシャ語系の語幹について baptize, organize, symbolize などの語形成が見られ、一方、ラテン語系の語幹について、civilize, nationalize, realize などを形成する。

また、alkarize, oxidize などに見られるように、根源的に「状態変化」という観念を常に伴う。

3. その他の小辞

ある接辞による合成語が、甲から乙への変化を示すというのは、とりもなおさず、その接辞が何らかのアスペクト機能を持つと言い換えることができよう。

前出の印欧祖語 yo- は、*argu-yo ‘to make clear’ のように yo- という接辞は ‘to make O C’ という構文を形成する強いアスペクト価を持つ接辞である。現代英語では、-fy という接尾辞が、同じような機能を持ち、clarify ‘to make clear’ などがその典型例である。

そもそも、この -fy の語源は、印欧祖語に遡れば、*dhe- ‘to set, put’ に由来する。サンスクリットの trāsati ‘he trembles’ ギリシャ語の tréō と比べると、ギリシャ語の tréō およびラテン語の tremo には語構成の上で -m- という要素が見られる。これは、ラテン語の premo や dormio にもみられるものである。*tres- および *trem- はともに印欧語根の *ter- から来ている。*ter- に形態素の -s- や -m- が結びついて、ある特別な意味を作り出している。

Meillet et Vendryes (1979: 157):

Pour exprimer l'idée du gonflement, de l'enfleure, il existe une racine de forme *teu-, pour laquelle sont attestées dans diverses langues des forms élargies *twel-, *twer-, *twen, *twem-, et aussi une racine de forme *keu- dont on connaît des élargissements *kwel-, kwen-, *kwem-.

ここで示した *twel-, *twer-, *twen-, *twem- は、どれも l/r/n/m といった形態素を含む拡張語幹である。これらの形態素は、英語、フランス語、ドイツ語ではそれぞれ *expansion/élargissement/Erweiterung* と呼ばれているものである。ラテン語の *tumeo* ‘to be swollen’ は、印欧語根の *teu- に由来する。この語彙に関しては、語彙の性質上完了幹とスピーヌムがないとされているが、一方、*tumescō* は完了幹を持っている。このことから、形態素 -m- の継続的意味合いから、継続的アスペクトを形成することが分かる。

3.1 -m-

Meillet (1964: 177):

Par exemple en grec *tréo* et *trémo* ne s’emploient pas indifféremment. Un présent *trémo* indique qu’on est pris d’un tremblement, tandis que *tréo* indique un tremblement dont on n’envisage pas le terme. D’autre part à côté de *trémo*, il n’existe ni aoriste ni parfait alors que *tréo* est accompagné d’un aoriste hom. *etressa*. En latin il y a à la fois un présent *premo* et un perfectum *pressi*.

ラテン語の *tremo* に対応するギリシャ語の *trémo* には完了もアオリストの形が存在しないのだが、ラテン語の *terreo* に対応するギリシャ語の *tréo* にはアオリストの形が存在する。このことは、とりもなおさず、形態素の -m- がアスペクト価を持つ小辞の機能をもっていることを示している。

ここで、「眠る」という事象を細かく分析すると、「入眠する (0 → 1)」という部分と「眠っている (1 → 1)」の2つの部分から成り立っている。

Ernout et Meillet (1985: 184):

dormio est un présent dérivé de la forme élargie, athématique **drem-*. Voir les observations faites sous *premo* et sous *somnus*. Pour exprimer la notion de «dormir» à l’aspect indéterminé, on a recouru à la racine **der-* avec le suffixe de présent *-em-, qui indique l’aspect «indéterminé».

Ernout et Meillet (1985: 635):

La forme à élargissement -m- de *dormio* marquait un état qui dure et ceci a entraîné l’élimination des formes verbales de **swep-* autres que celles du causative.

Ernout et Meillet (1985: 534):

L’élargissement -em- indique un procès qui dure; en latin, on a aussi *dor-m-io*, qui indique le fait d’être en

état de sommeil.

このことから、ラテン語の *dormio* は、「眠っている」という継続状態を示すことが分かる。つまり、形態素 *-m-* が継続のアスペクト価を持つからである。

Ernout et Meillet (1985: 700):

La racine **ter-* « trembler », qui a un caractère expressif, n'existe guère sans élargissement. Le groupe de **trem-* est représenté notamment par gr. *trémo*. Un groupe **tres-* figure dans skr. *trásati* « il tremble ». *Tréo* « je tremble » --- le type **tres-* est à **trem-* ce que **pres-* de *pressi* est à *premo*. Ici, *-em-* indique le procès qui dure, comme l'indique la différence de valeur de *tréo* et de *trémo* en grec.

dormio と *tremo* に加えて、アスペクト価を持つ形態素 *-m-* は、ラテン語の *fremo* や *premo* にも見られる。「to press」という事象は、この *-m-* によって継続的なニュアンスを強めている。通常、「絞る」という行為は、一瞬ではなく、ある一定の時間を要する行為であり、「うなる」「わめく」という行為も、ある程度の継続的な時間を要する行為である。

Meillet et Vendryes (1979: 177) によると、これに似た機能を持つラテン語の形態素に *-t-* があるが、これは非常に古い痕跡で *pateo* 'to be open' に見られる例で、*aperio* 'to open' と対比してみると継続ニュアンスが一層明確になる。

3.2 *-n-*

Meillet et Vendryes (1979: 189):

Le suffixe **-ne/o-* servait en indo-européen à former des thèmes de presents, généralement dérivés de thème constitués par la racine seule. Le latin en a des exemples dans *cerno* (de **kri-no*), *lino*; le grec dans *dákno*, *dartho*, *amartáno*, etc. La valeur de ces presents est souvent en grec d'insister sur le début du procès.

この *-n-* という形態素は、事象の達成に焦点を当てるような機能を持つ。例えば、ラテン語の *cerno* 'to separate, sift' という語は、印欧語根の **krei-* 「ふるいにかける」という意味を持つ。Lino 'to daub, spread' は、**lei-* 'slimy' または 'to flow' に由来するとされる。sterno 'to spread out, stretch out' の *-n-* も、アスペクト価をもつ形態素だと思われる。というのも、Vedic の *strnati*, *strnite* 'he spreads/pours' が語幹に expansion の **-na-* を含む古い痕跡を持つ現在形を形成しているからである。さらに、sino 'to let, allow' や sperno 'to sever, separate' そして pono 'to put' や contemno 'to despise' などは全て同様に *-n-* という形態素を語幹に持っている。これは非常に古い語構成の痕跡である。

さらに、-stinare ‘to stand up’ や tollo ‘to lift’ そして sternuo ‘to sneeze’ などこの鼻音が挿入されることで強い動作性のニュアンスを帯びている。ラテン語の stare ‘to be standing’ は母音交替の観点からすると e-grade で形成されている語彙で、一方の瞬間動詞的なニュアンスを持つ -stinare ‘to stand up’ は、zero-grade で鼻音が挿入されている。

Ernout et Meillet (1985: 694):

Le présent à infixe nasal qu’elle possédait indique d’une manière plus forte encore le procès qui aboutit à un terme et signifiait «enlever» .

しかし、ラテン語の tollo は、*tol-n-o から来ているので、語構成上は、鼻音接中辞ではなく、鼻音接尾辞ということになる。

「くしゃみをする」という事象もまた瞬間アスペクトであり、継続アスペクトでは用いられない。似たような例に Comrie (1981: 42) は、英語の cough という例を挙げているが、「咳をする」という現象と同様に、「くしゃみをする」という現象は、複数回続くこともあるが、事象的には「咳」も「くしゃみ」もそれぞれ瞬間的に発生する出来事であり、その単一の現象が複数回続く場合は、ラテン語では sternuto という frequentative form という語彙を用いる。この瞬間的事象を成立させる機能を持つ鼻音接尾辞は、鼻音接中辞同様、現在幹にのみ現れ、完了幹およびスピーヌムには通常現れない。

3.3 -d-

ten- という語根からは、-de/o- という接尾辞を伴う perfective aspect の tendo と e-grade で状態アスペクトの teneo が派生している。

Ernout et Meillet (1985: 495):

Le cas de *pendo*, *pependi*, *pensus* est évidemment parallèle à celui de *tendo*, *tetendi*, *tensus*. Mais en face de *tendo*, on a le verbe exprimant l’état *teneo* qui montre immédiatement que tout le verbe *tendo* est fait sur un présent à suffixe *-de/o- qui sert à marquer le procès déterminé. De même, *pendo* doit être bâti sur une racine **pen-*.

このように、形態素 -d- は、状態動詞の teneo と比べて、tendo では、perfective aspect を形成する機能を持つ。

Meillet et Vendryes (1979: 281):

Des présents en *-to* en *-do*. Il s'agit d'un élargissement ancien. Le latin a tiré parti de ce procédé d'élargissement. Il possède d'une part un petit groupe de verbes en *-c-to*: *flecto*, *necto*, *plecto*; et de l'autre des verbes en *-do* (dont le *d* peut présenter **d* ou **dh*) comme *cudo*, *tendo* (en face de *teneo*) avec un perfectum *tetendi*, *frendo* (en face de *fremo*), *-fendo* (dans *of-fendo*, *de-fendo*) remplaçant un ancien présent athématique répondant skr. *hánti* «il frappe», *pendo*.

-to や *-do* は古い要素の形態素である。flecto 'to bend' necto 'to bind' pecto 'to comb' などに見られるように、**-de/o-* と同じく、**-te/o-* も語構成上アスペクト価を持つ。

per- という接頭辞を伴って、percello という語は、perfective aspect の意味合いを強く出しているが、これは、*-ll-* がももとは *-ld-* で、この *-d-* は perfective aspect を形成する形態素であった。しかし、古い形態素ゆえ、時代とともにアスペクト的観念が薄れて、接頭辞 per- を伴った形でラテン語では存在していた語彙である。

Ernout et Meillet (1985: 494):

Pepuli et *pultare* montrent que la racine est ici **pel-*. Le *-ll-* de *pello* en face de *pulsus* suppose un présent à suffixe **-de/o-* indiquant l'aspect déterminé (procès aboutissant à un terme); la formation est la même que dans *tendo* en face de *teneo*, *tetini*, *tentus*, etc. (cf. le cas de *-cello*, *vello*, *fallo*)

これらの例からも、**-de/o-* という接辞を持つ動詞は、事象が完結する完了アスペクトを示すことが分かる。

4. 英語におけるAspectualizerとしての小辞

英語には、iterative および frequentative を形成する接辞がある。一つは、*-er* で、もう一つは、*-le* である。前者は、mutter, glimmer, flicker, whisper, clatter, stammer, stutter, stagger, shiver, shudder などが典型例である。後者は、babble, chuckle, drizzle, sizzle, sniffle, cackle, twinkle, dazzle などが典型例である。いずれも、語源的にはオノマトペに関係する。

4.1 *-le*

Pokorny (1989: 91) によると、音表象的な視点から考察すれば、英語の babble とラテン語の

babaeは同じオノマトペ起源である。

ラテン語のbabaeは、口ごもったり歯切れの悪い発話を模した語いであり、驚きや喜びの感情を表すものである。ラテン語のbulbusも、babaeと同じ語根から派生した語彙で、「どもる」を意味する。他にも、ロシア語のbalalailaも同根から派生した語で、reduplicationがこの種のオノマトペ関連の語彙には特徴的である。

英語のbabbleは-leという反復相を示す接辞を伴っているが、ラテン語のblatteroあるいはblattioが対応している。

4.2 -er

英語のmutterはラテン語のmuttioあるいはmurmuroが対応するが、いずれも、印欧語根の*mu-に由来する。*mu-は、両唇を閉じて発するほとんど聞き取れない発話音を示すものである。ラテン語のmuttioとmurmuroはいずれも*mu-で始まるオノマトペ起源の語彙であり、英語ではmutterおよびmurmurという意味である。他にも、ラテン語のsur-surroにはこうした重複が見られ、英語の意味は、whisperである。こちらも反復の接辞-erを含む。

5. 結論

語構成上、「変化」を表わす接辞として、trans-と-izeを取り上げ、それぞれを通時的に分析した。ラテン語のtrans-Vは、接辞の意味がそのまま「～を超えて」「～を貫いて」を反映したもの、A→Bという「移動」を意味するもの、さらにそれを比喩的にとらえて「変化」を意味するもの、そして、完了アスペクトの機能を持つものが主な柱であった。また、英語では非常に生産性のある接辞である-ize「～化する」は、ギリシャ語起源の接辞で、英語では「状態変化」を意味する他動詞を形成するが、印欧祖語の*id-yo-が語源で、後期ラテン語、古フランス語を経て、英語に流入した接辞である。

導入で触れた「うつろふ」の「ふ」ももはや、現代語では「うつろう」「かたろう」などにわずかな痕跡を見出すばかりであるが、ラテン語のaspectual morphemesも同様に、前者の2つの接頭辞と接尾辞とは対照的に、語源的に分析すると、もともとは複合語であったものが、時を経て、その觀念が薄れ一語として認識されるようになる例がかなり存在する。とりわけ、古い時代の痕跡を持つ語彙は、その分析が難しくなる。ラテン語の語構成に見られる、-m-, -n-, -d-は、その典型例である。しかしながら、単なる遺物ではなく、アスペクト価を持つ形態素である。

-m-は、dormioに見られるように、継続アスペクトを形成する機能を持つ。-n-は、-stinareに見られるように、事象の始まりから終わりまでを視野に入れた完了アスペクトを形成する機能を持つ。

また、-d-は、同根のteneoに対して、tendoの見られるように、完了アスペクトを形成する機能を持つ。印欧祖語の時代には、状態や変化を示すニュアンスの使い分けに、こうした形態素を使っていた一つの痕跡と言える。形として残っているのは、ラテン語のamoの未完了と未来に見られるamabam/amaboの-b-という形態素で、これは未完了系の時制を形成するのに用いられている形態素である。ちなみに、この形態素は英語のbe動詞と同じ語源である。

References:

- Bauer, L. (1993) *English Word-Formation*, Cambridge University Press.
- Comrie, B. (1981) *Aspect*, Cambridge University Press.
- Ernout, A. et Meillet, A. (1985) *Dictionnaire étymologique de la langue latine*, Klincksieck.
- Ernout, A. et Meillet, A. (1974) *Morphologie historique du latin*, Klincksieck.
- Gaffiot, F. (1934) *Dictionnaire latin-français*, Hachette.
- Gildersleeve, B. L. (1992) *Latin Grammar*, Nelson St. Martin's Press.
- Hoad, T. F. (1986) *The Concise Oxford Dictionary of English Etymology*, Clarendon Press.
- Katamba, F. (1994) *Morphology*, Macmillan.
- Klein, E. (1966-7) *A Comprehensive Etymological Dictionary of the English Language*, 2 Vols, Elsevier.
- Lewis, C. and Short, C. (1933) *A Latin Dictionary*, Oxford at the Clarendon Press.
- Lass, R. (1997) *Historical Linguistics and Language Change*, Cambridge University Press.
- Lehmann, W. P. (1993) *Theoretical Bases of Indo-European Linguistics*, Routledge.
- Matthews, P. H. (1993) *Morphology*, Cambridge University Press.
- Meillet, A. (1964) *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, University of Alabama Press.
- Meillet, A. (1977) *Esquisse d'une histoire de la langue latine*, Klincksieck.
- Meillet, A. and Vendryes, J. (1979) *Traité de grammaire comparée des langues classiques*, Honoré Champion.
- Morita, S. (1990) "An Essay on Aspect and a Nasal Infix," The Society of English Studies at Waseda University, *Lingua* Vol.12 pp.2-14.
- Morita, S. (1992) "An Essay on Perfect and Aspect," The Society of English Studies at Waseda University, *Lingua* Vol.14 pp.81-97.
- Morita, S. (1995) "A Comparative Study of the Meaning of *tango* in Latin, *toucher* in French, and *touch* in English," *Bulletin of Yamanashi Women's Junior College*, Vol.28 pp.19-25.
- Morita, S. (1996) "A Comparative Study of the Meaning of "Sit" in English, Latin, French, and German," *Bulletin of Yamanashi Women's Junior College*, Vol.29 pp.1-13.
- Morita, S. (1997) "A Thought on a Nasal Infix in Latin," *Bulletin of Yamanashi Women's Junior College*, Vol.30 pp.1-13.
- Morita, S. (1998) "Prefixes in Latin as an Aspectualizer," *Bulletin of Yamanashi Women's Junior College*, Vol.31 pp.1-20.
- Pokorny, J. (1989) *Indogermanisches Etymologisches Wörterbuch I, II*, Franke Verlag Bern und Stuttgart.
- Rey, A. (2000) *Dictionnaire historique de la langue française*, Robert.
- Sweetster, E. (1997) *From Etymology to Pragmatics*, Cambridge University Press.
- Tucker, T. G. (1931) *Etymological Dictionary of Latin*, Ares Publishers Inc.

- Verkuyl, H. J. (1996) *A Theory of Aspectuality*, Cambridge University Press.
- Watkins, C. (1985) *The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots*, Houghton Mifflin Company.
- Walde, A. und Hoffmann, J. B. (1982) *Lateinisches Etymologisches Wörterbuch*, Carl Winter.
- 小西甚一 (1965) 「古文研究法」 洛陽社
- 寺澤芳雄 (1999) 「英語語源辞典」 研究社